

---

# 危ない二人

玲人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

危ない二人

### 【NZコード】

N2394D

### 【作者名】

玲人

### 【あらすじ】

容姿端麗の噂の二人。実は・・・この二人には誰にも言えない秘密があつた！

## プロローグ（前書き）

本文に出てくる学校名・登場人物など、すべて作者の妄想からのものです。初めての小説なので！温かい目でご覧下さい

## プロローグ

『 よう・・・・あの一人・・・性格も見た目も全然違うのに・・・いつも一緒にいるんでるよな・・・』  
ヒソヒソと男子生徒たちが語る。

“あの一人”とは、

松木香紫朗 まつきこうしろう 如月高等学校 1 - 2 出席番号17  
愛称 こうちやん

成績・・・常に下らへんをウロウロしている・・・  
ケンカ、かなり強く運動神経抜群 運動系の部活から誘いが山ほど  
くる。本人は・・・あまり興味がないらしく入りたがらない。趣味  
が読書。以外に地味だ・・・。

ルックス、眩いくらいの金髪に少し長めのショートウルフ。肌は  
浅黒く目には紫のカラーインタクトを入れている。身長177cm  
体重60kg

芹沢満瑠 せりざわみちる 如月高等学校 1 - 4 出席番号10

愛称 ミッチー

成績 常にTOP3入り。

一度聞いた事は忘れない。それがどんなに難しい文章でも長文でも  
丸暗記してしまう。趣味が・・・盆栽・・・香紫朗に「じじくせえ  
!」とよくからかわれる。

ルックス、重めのマッシュレイヤーで髪色が黒。肌は雪白で目の黒  
さが引き立つ。

身長180cm 体重63kg

これが如月高校の有名人一人だ。対照的でどっちもルックスは抜群

だ。

あまり二人がいつも一緒に行動するので・・・ホモじやないかと噂  
が立つくらい仲が良い。

この二人・・・実は、ある“秘密”がある・・・誰にも言えない秘  
密が・・・。

それは、後に・・・。

# 第一章 甘い香りと危険な香り 1

如月高等学校は制服・私服どちらもOKな規則もほとんどない自由な学校だ。

香紫朗は私服で、今日はシンプルに黒のTシャツにブルージーンズだ。

満瑠は反対に制服で、今は夏なのでトップは白のシャツにネクタイはブルーと紺の斜めストライプ。ボトムは紺のストレートだ。冬になると黒のジャケットが付いてくる。

香紫朗はその制服が「ダサイ！」ので一度も袖を通さずにいる。

学校の帰り道、二人はいつも通り『Rose room』に涼みに行つた。

『Rose room』はレトロな雰囲気が漂う喫茶店で店内には昔懐かしいブリキの玩具やレコード壁には昭和時代のスター達のポスターや映画のパンフレットが貼り付けられている。漂う匂いも香ばしいコーヒーの匂いと共に“懐かしい”匂いもしてくる。

香紫朗と満瑠はドアベルのカランカランと鳴る木の戸を押し、いつもお気に入りの一階の席へと向かった。階段も木作りで上るたびにギシッギシッと軋む。一階の明るめの店内とは違い、二階は少し照明を落とし窓一つもない落ち着いた雰囲気だ。BGMはジャズが控え目に流れしており会話を邪魔にする感じはない。

一人は一番奥の席に座りマスターがタイミングよく来ると同時に決まった注文をする。

『オレはホットケーキとアイスココア。』

と、香紫朗。

『僕はチョコパフェ。』

満瑠が伏せ目がちに言つ。

マスターはクスリと笑い一人を交互に見、一言。

『“いつもの奴”だね。相変わらずだね。』

小さめのグラスにレモンを絞つたお冷を一人の前に置き一階に下りていった。

『チツ！余計なことは言わんでいい！黙つて注文聞いてりや～いいんだ！』

香紫朗が一階に下りて行ったマスターに聞こえるように言い放つた。

『ひっちゃん、態度悪すぎ。いつもサービスして貰ってるのに・・・。』

『

満瑠が顔を赤らめて香紫朗に言った。

『満瑠！オレ達は毎日売り上げに貢献してくれる密だぜ！サービスは当たり前だ！』

香紫朗はイスの背もたれに両肘を乗せふんぞり返つてゐる。

『それよかあ・・・・満瑠・・・・鈴木仁・・・・呼び出しがれてい

たけど・・・・“大丈夫”だつたか?』

じつと満瑠の目を見つめ聞いた。

『ああ、平氣。いつもの事だよ。“心配”する事じゃないよ。いつも  
ちゃんと程じやないけど・・・十分“いたよ”』

クスクスと満瑠は笑い 細かい水滴が付いたグラスを持ち上げ喉を  
鳴らさないよう静かに飲んだ。

『そつか・・・』

ギシッギシッ 一階の方から上って来る呟音と共にフンワリと甘いホ  
ットケーキの匂いが漂ってきた。

遡る事、お休み時間の屋上。

満瑠は1・3の鈴木仁に呼び出され屋上にいる。“毎度の事だ”

『芹沢……おめえ人の女に色々使うんじゃね～よー』

毎度のこのセリフ。

（もつ、聞き飽きた。変わったセリフ聞きたいや。）

満瑠はウンザリ顔で仁の顔を見た。

『なにボオ～っとしてんだよ～ーなんとか言えよー』

仁は今にも殴りかかりそうな雰囲気で声を荒げた。

『……別に。色々使ってないよ。ってか・・君の女って?・誰の事?』

仁はそうとう頭にきてたんだろう。名前を言わず自分の言いたいことだけ言つてゐる。仁は顔を真つ赤にして言つ。

『桐生美佳だよーお前と同じクラスのー』

（同じクラス……ああ……あの子か。茶髪で下がり眉の。）

顔を思い出しクスリと笑つた。

『ニヤニヤするんじやねえー！美佳に近づくなー。』

満瑠は不思議そうな顔で聞いた。

『いや、僕は美佳に喋りかけられた事すらないから。近づくなって言われても・・・。』

『うひ・・・仁を余計に怒らせる結果になつたようで、胸倉をつかまれ殴りかかろうとした。

『・・・うやうやしく！人をおちよぐのもいい加減にしろー。』

仁の右の拳が上がり満瑠の右頬に向かって振り下ろされた！

『仁。』

満瑠が一言名前を呼んだ。

仁の動きが途端にピタリと止まる。仁は目を開き何か物言いたそ  
うとしてるが・・・。

『仁、僕の目を・・・見て・・・。』

満瑠の目が深い黒色から・・・グレイに変わる。仁はこれ以上開け  
ないくらい目を剥いた。

『ゅく・・・口を・・・開けて・・・』

仁の意思とは反対に口がゆきくじと開いてくる。3センチほど開く  
と満瑠は仁の口へとゆっくり顔を近づけた。唇と唇が触れるか触れ

ないかの距離でピタリと止め、スゥーっと「仁」の息を吸つた……。  
いや……息ではなくて……「仁」の息だ。満瑠は「仁」の生氣を吸い取つてゐる。

「仁」は恐怖で叫ぼうしてゐるが声が出ない。フリーズした身体が段々痺れた様に力が抜けていく。

（おおつとーこれ以上……吸い取ると、ミイラになる……。）

満瑠は口を閉じ顔を離した。満瑠を掴んでいた手は緩み腑抜けになつた身体はコンクリートの床に崩れ落ちた。

『「仁」……もつ少し心を綺麗にしろよ……不味い。』

満瑠は顔をしかめ、倒れた「仁」を置き去りに教室に戻つた。

満瑠の秘密。氣を吸い取る陰の力。吸われた相手は脱力感に見舞われる。吸いすぎると……死に至る危険な力だ。「仁」はこの後起き上がつても全て忘れているだらう。脱力感は大体一日位で回復する。

満瑠は暴力を振るおうとする相手にはこの力を使う。やられた相手は何があつたか……忘れてしまうので満瑠の力がばれる事は無い。

フンワリと甘い香りが満瑠の鼻孔をくすぐつた。

『そか！そか！問題ナシならいいんだ。』

香紫朗は用意されてゐるナイフは使わずフォークで5枚あるホットケーキを2枚グサッと刺し口一杯に頬張つた。口にメイプルシロップの甘みとバターの濃厚な味が広がりウツトリと香紫朗の顔が緩んだ。

『 いりうちやん・・・もつ少しむづくり味わって食べれば良いの。元の』

満瑠はチョコパフェに乗ってるイチゴを側に除けトロリと溶け掛かつた表面のチョコとバニラアイスを同時にすくい口に運んだ。

香紫朗のホットケーキは2枚おまけでサービス、満瑠のイチゴも本当はほかのフルーツだが満瑠の好物をマスターはわざわざ乗っけてくれてる。

『 美味いもんはサッサと熱いうちに食つもんなんだよー! 満瑠ー! おめえこそ! サッサと食わねえとー! アイス溶けちまうぞー! 』

二人はお互に広がる甘さに顔を緩め目の前にある好物に没頭した。この二人の唯一の共通点・・・甘い物好きな所だけだ。

先に、香紫朗が食べ終え、タバコに火を点け一服してくる。

『「ハハちゃん……臭い。まだ僕食べ終えてないから吸わないでよ。』

満瑠<sup>みつる</sup>が顔をしかめた。

『早く食い終わればいいだらう、チンタラ食つてんなよ』

香紫朗は深く吸つたタバコの煙をわざと満瑠に向かって吹き付けた。  
『つわーー・まじつ臭いからー・やめるよー・臭いの嫌いなの分つてわ  
ざとやるなよー。』

満瑠の皿<sup>さら</sup>が少しグレイに変わつたといつてゐる。

『おおーとー・ミシチーー・皿<sup>さら</sup>の色変わつたー・せばー・せばー。』

急いでタバコを灰皿にもみ消す。

『ハハちゃんさー・・・・・ミシチーつて言われると・・・・・キモい・・・・・

』

皿<sup>さら</sup>の色が黒に変わつた。

『だったら、オレの事“ハハちゃん”って皿<sup>さら</sup>のやめてくれよー・  
やん付けされるガラじゅなー。』

満瑠の目が細まりクスクスと笑った。

『だつて、しょうがないじゃん…小さい時からの呼び名はそう簡単  
に変えれないよ。』

最後に取つて置いたイチゴをバニラアイスと一緒にすくい口に運んだ。

『チツ！おめえがそう呼ぶから！みんな“こつちやん”って呼ぶ…  
・気に食わねえ…・つと！食い終わつたか！さつさと“済ませよう  
う”ゼー。』

香紫朗は半分ほど残つていたアイスココアを一気に飲み干した。

『ああ、頼む。』

二人が座つている席は周りから見えない死角になつていて。

満瑠は口元をペーパーで拭き、真つ直ぐ香紫朗に向かつて姿勢を正した。香紫朗は紫のカラー・コンタクトを取り、満瑠の頭に手をかざした。香紫朗の目の色は金色に光つてゐる。“普通”的な人が香紫朗の目を直視する事は出来ない。パワーが強すぎて目が潰れてしまうからだ。満瑠は陰のパワー、香紫朗は陽のパワーを持っている。

香紫朗は満瑠の目を見つめ、かざした手に気を溜めた。全身の気が手に集中して熱くなる。満瑠を見つめる目も眩いばかりの金色に輝き満瑠のグレイに変わつた目を照らした。

目に見えない波動が満瑠の身体に伝わってくる。

香紫朗は満瑠が“喰つた”“不味い物”を陽のパワーで吹き飛ばしている。

目の色の輝きが段々と落ち着き、かざした手を下ろした。

『あんま、不味いもんばっか喰つてると・・・寿命が縮むぜ？たまには美味しいもんでも喰え！ただでさえ・・・ひょろつちい身体してんのによ。』

香紫朗はコントラクトを着けながら呟くように言った。

『・・・仕方ないだろ。いつちゃんみたいにケンカ強ければ何も好んで不味いもん喰わないよ。』

満瑠はイスの背もたれにドサツともたれ掛かりながら香紫朗の顔を見た。目は紫色に変わつてニヤニヤと笑つてる。

『ケンカなら、オレが教えるつて言つてるだろ。手取り足取りみつちり！教えてやるよ』

『無理。』

即答。

『ひつちゃん・・・人には向き・不向きっていうのがあるんだよ？僕にはケンカは向いてないよ。好きじゃないし、面倒。』

フウツとため息をつき、前髪にハラッとかかった細く柔らかい髪をかき上げた。

『わあ～つた！おめえ～は！趣味の盆栽でも弄つてりや～いこよ

ポケットからタバコを取り出し、口にくわえて火を点けた。

『いじつちやんじやーいい加減タバコ止めなこと・・・寿命が縮むよ？』

満瑠は香紫朗の田を見つめ薄く田を細めクスクスと笑った。

『オレからタバコを取り上げんなつー。それこそ身体の毒だぜ。』

吸い込んだタバコの煙を満瑠に向かつて吐き出した。

『香紫朗。』

満瑠の目がグレイに変わった。

『Rose Room』に香紫朗の悲鳴が鳴り響いた・・・・。

## 第一章 危ない転校生がやつて来た―― 1

『ウオ～めちゃダルイ……満瑠の奴……思いつきり吸いやがつて……』

朝のHR。香紫朗は昨日「Rose Room」で満瑠を怒らせた罰で、“氣”を吸い取られた。普通は一晩寝ればダルさは取れるが…。

『香紫朗！朝っぱらからダラシとするんじゃない！』

担任の赤ハゲ松平順一が怒鳴った。「赤ハゲ」いつも顔を真っ赤にしてる上に“ハゲ”てるから付いたあだ名だ。

『おおっと！転校生紹介する！上田！入って来～～～！』

赤ハゲは入り口に向かつて叫んだ。教室内がどよめく。

『転校生？！聞いてたか？？来るつて？？女か？！』

ザワザワと驚きの声が聞こえてくる。

『お～～～い！～～～！上田？！恥ずかしがらんに入つて来～～い！』

クラス全員が入り口に注目する中、戸から転校生が入ってきた。

転校生は“女”だった。

如月高校の制服ではなく、前の高校の制服だろう。トップは白のセ

一ラード襟の部分に紺のラインが一本線入ってスカートは紺のビダ。スカーフも同じく紺色だ。

『もっとシャキとしろー上田ーさーみんなに自己紹介しろ。』

赤ハゲが机に両手をつき上田に促した。

『・・・・は・初めまして・・・@¥w1g・・・』

初めましては小さい声ながら聞こえたが後が・・・聞こえない。

『聞こえませーーん! もっと大きな声で喋つてくださいーー!』

香四郎が一番後ろの席からイカついた声で言い放つた。

『ハハちゃん~! 転校生脅すなよー!』

香紫朗の前の席の都筑翔太(つばきしょうた)がニヤ付いた顔で後ろを振りき香紫朗に向かつて言った。教室内の所々から笑いが起こってる。

『・・・う・・う・・・上田・・・れ・・れ・・・澪・・・・ですー!』

転校生の名前は上田澪(うえだれい)。身長は150cmあるかないか位だろう、ガリガリにやせ細っている。伸ばしつぱなしの前髪が目を覆い隠し髪の色が・・光のあて具合でか・・グレイに見える。

クラスのみんなは初め赤ハゲに“転校生”と聞いて期待していたが・・・一瞬にして落胆した。

『もっと、元気よく自己紹介せんとーー! 上田! ほれ! 香紫朗が上田の事お気に召したようだからー香紫朗の席の隣に座つてよし!』

赤ハゲはニヤツと笑い、香紫朗が座っている窓際の一一番後ろの席に指差した。

『 うひちやん、 良かつたね！願いが叶つて！』

前から一一番目に座っている金井裕子かなこ ゆうこが冷やかした。クラス内のあつちこつちから笑い声が聞こえてくる。

もし、これが・・・この転校生が美人なら・・・女子共は黙つてないだろ？。“イケてない”転校生だから安心して冷やかしも出来る事だ。

『 うるせえ〜〜〜！オレは頼んだ覚えないぞ！赤ハゲ！』

香紫朗がしまつた！つと言つ顔をした・・・  
赤ハゲ・・・さらに顔が赤くなつた・・・

『 ほほお〜〜〜！香紫朗・・・どうやら君は・・・放課後・・・私の“お手伝い”を・・・したいようだね。放課後！体操着に着替えて私の所に来るようにな！以上！H.R終わり！』

赤ハゲは問答無用顔で言い、名簿を持つて教室から出て行つた。

『 あ、それと！君のお姫様の校内のご案内も一見よろしくな！』

赤ハゲは戸口から真つ赤になつた顔だけを覗かせ香紫朗に向かつて追いかけてきた。隣には上田が下を俯き教科書の準備に取り掛かっていた。上田の顔を覗き込み切なげに言った。

『ですってよ・・・・・澪姫・・・・』

香紫朗の一言で教室内が爆笑の渦に巻き込まれた・・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2394d/>

---

危ない二人

2010年10月9日03時47分発行